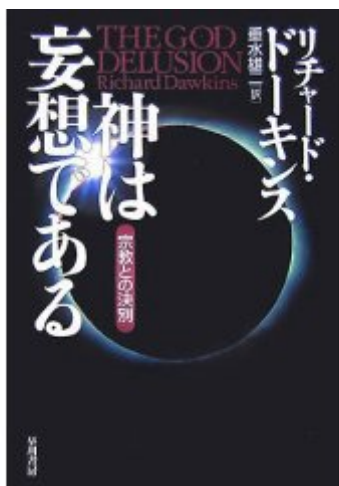


# 神は妄想である

## 宗教との決別



タイトル	神は妄想である - 宗教との決別
原題	THE GOD DELUSION
著者	リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins)
訳者	垂水雄二
出版社	早川書房
発売日	2007年5月25日
ページ数	578p

本書が2006年の9月に発売されると、たちまちニューヨーク・タイムズや米国アマゾンのベストセラー・リストのトップ10に入っています。賛否は予想通り真っ二つに分かれています。支持する声は優勢であり、米国の知識人が本書を待ち望んでいたことがよく判ります。

本書は、ドーキンスの著書の中では、極めて過激なものの一つです。利己的遺伝子も衝撃的でしたが、基本的には生物学内部の話であり、学問的にも現在の主流に属する考えでしたが、テーマが「宗教」となれば、生物学者のみならず、全人類を相手にするわけですから大きな異論・反論が寄せられることは疑いありません。かつては、短いエッセイで宗教批判を何度かしていましたが、今度はこの大著をまるまる一冊あてて、「神は妄想であり、しかも有害な妄想である」と断じたわけですからこれはただ事ではありません。

人を救うはずの宗教が、憎しみを煽り立て、情け容赦のない殺戮をけしかけています。そうしたことは何も根拠もないのに、自らの信じる宗教だけが絶対的に正しいと思いつく原理主義者、とりわけ、「ユダヤ教」、「イスラム教」、「キリスト教」という同根の宗教に巣くう原理主義が元凶だということです。宗派間の対立は沈静化するどころか、ますますその度を増しており、いまこそ、原理主義者たちの迷妄を打ち破ることに全力を尽くさなければならないというのが、ドーキンスの本書を書く最大の動機なのです。

また、進化論的な考え方が神や道德の領域にどこまで通用するのか、突き止めてみようというのも動機の一つのようです。

進化論はその誕生の時から宗教と対立する要素をはらんでおり、信仰心の篤い生物学者達をしばしば悩ませてきました。論理の筋を通せば、「創造論」をはじめとして宗教的な教えと矛盾することは避けがたいからです。

しかし、大抵の生物学者は、真っ向から宗教を批判したりはしません。スティーブン・J・ゲールド(アメリカの古生物学者・進化生物学者・科学史家:著書に「ワンダフル・ライフ」など)は、科学と宗教の守備範囲を分けて、科学の領域に宗教が入り込んできた時には反撃しますが、相手の陣地にまで攻め込むようなことはしませんでした。

ドーキンスは、

- ・ 人はなぜ神という、ありそうもないものを信じるのか?
- ・ 政治的な見解の相違は論争の対象になるのに、事が宗教になるとどんな価値観でも尊重されなければならないのはなぜか?
- ・ 「私は無神論者である」と公言することがはばかれる。たとえば、現在のアメリカ社会のあり方は、おかしくはないのか……。

と問いかけ、宗教が社会へ及ぼす実害のあることを訴えるために、彼は科学者の立場からあくまで論理的に考察を重ねながら、神を信仰することについてあらゆる方向から鋭い批判を加えていきます。

「世界と生物は聖書の創世記にある通りに神様が7日間で作り上げた」(いわゆる創生論)と考えるのがキリスト教の原理主義者であり、アメリカではそれが無視できない勢力にまで成長して来ました。進化論は物理などとは異なり、人間の起源を直接扱うだけに宗教者からの攻撃も熾烈を極めていきます。

ドーキンスは、そうした考えにこれまでも反論を繰り返して来ましたが、9.11(2001年)のテロ事件を契機にもう我慢出来ないとばかりに腹を括ったようです。宗教全体と真っ向から勝負し、生物学者として高らかに無神論宣言を行なったのが本書というわけです。

ドーキンスの宗教批判は徹底しており、哲学的、科学的、聖書解釈的、社会的、その他あらゆる側面から、神を信じるべき根拠をつぶしていき、何処にも逃げ場を与えません。科学と宗教は守備範囲が違うという主張も退けます。

さて、本書を読んでいて少なからずショックを受けた箇所があります。ドーキンスが原理主義的な宗教を敵視するのは、それが科学的な営為を積極的に破壊するからだとして、一人の地質学者の悲惨な例を挙げます。

アメリカの地質学者、カート・ワイズの場合です。彼は現在、テネシー州デイトンにあるブライアン大学起源研究センターの責任者です。彼はシカゴ大学で地質学の学位を取り、そこでスティーブン・J・グールド(前記)のもとで研究します。彼は高い素質に恵まれ、将来を有望視された科学者であり、しかるべき大学で科学を教え研究を行うという夢を達成する道を歩むことが十分にできる人物でした。

それから悲劇が彼を襲います。それは外部からではなく、彼自身の心の内部からやってきたのです。彼の精神は、地球(これがシカゴ大学およびハーヴァード大学における彼の地質学的研究テーマでした)が一万年以下の年齢しか持たないと信じるように彼に要求する、原理主義的な宗教に洗脳され、衰弱してしまっていたのです。彼はあまりにも知的であったために、自らの宗教と科学が真っ向から衝突するのを認めないではいられず、この心の葛藤が彼を次第に不安にしていきます。彼は聖書を取り上げ、一通り読み通し、もし科学的な世界観が事実であれば削除しなければならない全ての節を、文字通り切り取っていきます。この情け容赦のない、正直で骨の折れる作業が終わったとき、彼の聖書の手元に残ったものは余りにもわずかだったので、これ以上続ければ聖書全体を通じてまだ、無傷で残っている部分があるとはいえ、聖書を持ち上げれば間違いなく二つに裂けてしまうことに彼は気が付きます。

そこで、彼は「進化」と「聖書」の間で決断をしなければなりません。「聖書が正しく、進化が間違っているのか」それとも、「進化が正しくて、私が聖書を投げ捨てなければならないのか」のどちらかの選択を迫られるわけです。

彼が神の言葉を受け入れ、進化を含めて、それに反することになりそうなあらゆる事柄を避けようと思ったのは、その夜だった。彼は大いなる悲しみのうちに、科学における彼の夢と希望をことごとく火に投げ入れた。とあります。

カート・ワイズの場合は、聖書の真理はいわば論理学でいう「公理」であって、推論の過程によって生み出される最終産物ではなく、聖書こそが真理であり、もし証拠がそれと矛盾するように思えるなら、「捨て去るべきはその証拠であって、聖書ではない」と結論しているわけです。

『これほど悲しいことはありません。カート・ワイズの物語はただひたすら痛ましい限りです。彼がなすべきは「聖書を投げ捨てる」か、多くの神学者がしているように、「それを象徴的、寓話的に解釈すれば良かったのではないか」と思われてなりません。彼がしたことは、原理主義的な行いであり、彼は「夢」と「希望」と一緒に、「科学」、「証拠」、そして「理性」をも投げ捨ててしまったのです。』とドーキンスは嘆きます。

ドーキンスは、原理主義的宗教は、おびただしい数の、無辜(むこ)の、善意で熱意のある若者の心を荒廃させることに専心していると非難します。無知を認め、一時的に謎を謎として抱え込むことは、健全な科学にとって不可欠なのに、宗教の本当の意味での悪い影響の一つは、理解しないまま満足するのが美德だと教えるところにあるからです。すなわち、TEDの常連の哲学者ダニエル(ダン)・デネット流に言えば、カ

ート・ワイズの脳は原理主義的な宗教に完全にハイジャックされていたわけです。

現状を打開する方策としてドーキンスが考えているのは、「子供の宗教教育からの解放」があります。ほとんどの人間は幼い時に親の宗教の影響を受けて信仰を持つに至ります。子供の脳は、目上の人間の教えに教化されやすいという生得的な傾向を持っています。全ての宗教扇動家や布教者はそのことをよく知っていて、出来るだけ早くから宗教教育をしようとします。

イスラム世界では、国家の教育体制の不備について、イスラム学校で幼い子供を集めて教育することが各地で行われており、そこから果てしなく殉教者が送り出されていることを指摘しています。

そのことは、キリスト教世界でも同様で、米国では公教育を拒否して、宗教学校で学ぶことが認められており、そこでは進化論を信じない子供たちが育てられているといわれています。驚いたことに、米国国民の中で科学的な進化論を信じているのは国民の10%にも満たないといわれています。

ノーベル賞を受賞したアメリカの物理学者スティーヴン・ワインバーグは「宗教は人間の尊厳に対する侮辱である。宗教があってもなくても、善いことをする善人はいるし、悪いことをする悪人もいるだろう。しかし、善人が悪事をなすには宗教が必要である」と喝破しています。

ヨーロッパにおけるキリスト教は長い歴史の中で次第に世俗化を遂げ、近代社会のルールに抵触しないものになっていますが、原理主義に牛耳られたイスラム教や米国のキリスト教では、まだ世俗化の見通しは暗いようです。

いまやイスラム世界の反米運動は、反近代・反キリスト教という図式に変わり果てており、イスラム教が世俗化しない限り、現代社会との軋轢の種は尽きそうもありません。しかし希望がないわけではありません。それはイスラムの女性たちの意識の高揚です。すなわち、女性の権利要求運動がイスラム教の世俗化の鍵を握るといわれています。欧米諸国でも、婦人参政権が認められたのは20世紀になってから（日本1945年、仏国1945年、英国1928年、米国1920年など）ですから、案外事態の展開は早いかも知れません。

神は妄想であるかどうかは本書を読んだ読者に任せるとして、自分の力と才能を信じて、論理と実証で徹底的に詰めていくドーキンスの姿勢には眼を見張るものがあります。

本書は、彼自身の他の著作に比べて、テーマが宗教ですから生物学者だけでなく、幅広い読者も対象になることもあって、その論調はますます冴えわたっています。

とはいうものの、人は理性的ではないから宗教が存在するわけですが、ドーキンスのように理性一点張りで主義・主張を通した場合、理性では扱えないものがあるとい

うことを根本的に信じていないわけですから、どこかで理論が破綻することはないのでしょうか。例えば、理性的でない存在を理性で否定するというのは矛盾でしかないのではないかというように。

欧米の文学作品を読む場合、「聖書」についての無知は、欧米文学の鑑賞能力を乏しいものにすることだけは確かです。聖書が世界のベストセラーと言われる所以です。

宗教の問題のように、波風が立ちやすいテーマについて、私達日本人は微温主義的になりがちなことを考えると、本書から読み取れるこうした峻厳な知的風土が日本にはほとんど育っていないことに改めて気付かされます。欧米の自然科学者は精神面でも厳しく鍛えられていることに少なからぬ羨望を覚えました。

- ・ **米国の知識人**についてもっと知りたい、
- ・ 自爆テロが何故起きるかを知りたい、

などに興味を持っている人にはお勧めの書です。宗教を信じている人、信じていない人、それぞれの立場からの理論武装とはどういうものかも教えてくれる書です。

2011. 5. 25

---